

東京都における平成 29 年度のスモン患者検診

亀井 聡 (日本大学医学部 内科学系 神経内科学分野)

小川 克彦 (日本大学医学部 内科学系 神経内科学分野)

里宇 明元 (慶應大学医学部リハビリテーション医学教室)

大竹 敏之 (財団法人東京都保健医療公社荏原病院神経内科)

研究要旨

東京都における平成 29 年度のスモン検診患者の現況を明らかにする。方法では、平成 29 年度のスモン検診の集計から得られたデータを分析し、スモン検診受診患者の現況について検索した。受診患者数は 15 人 (男性 ; 6 人、女性 ; 9 人) であった。年齢は 14 人が 65 歳以上の高齢者であった。診察場所は、14 人が来所 (1 人は無回答) であった。発症年は「昭和 40~44 年」が 10 人と目立ち、重症時も、「昭和 40~44 年」に多かった (9 人)。発症年齢は 13 人が 15 歳以上であったが、幼少時発症 (0~4 歳) が 1 例にみられた。発症時の視力障害の程度は、視力低下の目立つ「明暗のみ」と「眼前指数弁」がそれぞれ 1 人であるのに対し、「ほとんど正常」と「軽度低下」が 11 人と多かった。歩行障害は 15 人にみられ、「不能」が 9 人と多く、「つかまり歩き」の 3 人が次いでいた。平成 29 年度では、視力合併症は 12 人にみられた。視力の程度では 9 人が「ほとんど正常」~「新聞の細かい字が読める」であり軽症例が多かったが、5 人は「新聞の大見出しが読める」状態であった。下肢筋力低下では「なし~軽度」が 10 人と中等度以上の 5 人よりも多かった。歩行障害は 14 人にみられ、不能例はなかったが、「独歩やや不安定」と「ふつう」は合わせて 3 人と少数であり、「一本杖」が 6 人と多く、「つかまり歩き」が 3 人にみられた。外出では、「近く / 遠くまで一人で可能」が 12 人と軽症例が多く、「不能」~「車椅子」は 3 人であった。体幹・下肢の表在感覚障害は 14 人にみられ、感覚障害の末梢優位性を伴っていた。触覚異常も 14 人にみられ (低下 ; 12 人、過敏 ; 2 人)、痛覚異常も同じく 14 人にみられた (低下 ; 10 人、過敏 ; 4 人)。下肢振動覚障害は 14 人にみられ、中等度以上の障害が 11 人と多かった。異常感覚は全例にみられ、中等度~高度が 12 人と多かった。異常感覚の内容では、「しめつけ・つっぱり感」・「じんじん、びりびり感」・「痛み」がそれぞれ 7 人にみられた。軽度の下肢皮膚温低下が 15 人に観察され、自覚的な下肢冷感 4 人にみられた。尿失禁は 11 人にみられた。「初期からの経過」では、軽減が 9 人と多く、不変は 4 人で、悪化は 1 人と少なかった。「10 年前からの経過」では不変が 6 人、悪化は 7 人になっていた。身体的合併症は 14 人にみられ、白内障 (10 人) が多く、高血圧症と脊椎疾患がそれぞれ 8 人であった。障害要因は、「スモン単独」が 5 人で、「スモン + 合併症」が 10 人と多かった。療養状況は、在宅が 12 人と多く、診察時の重症度でも重度例はなく、中等度が 9 人と多かった。現在、治療は 15 人全例で受けていた。スモンの治療を受けている患者数は 5 人で、合併症治療を受けている患者が 7 人であった。治療内容は 8 人が内服加療を受けており、7 人がマッサージを受けていた。「最近 1 年の転倒」は 7 人にみられ、「倒れそう」も 5 人にみられた。一日の生活のうち、「ほとんど毎日外出」

～「時々外出する」が12人で、屋内で主に生活している3人よりも多かった。介護の有無では、要介護が12人で「必要なし」の2人よりも多かった。発症時では、視力障害よりも歩行障害の方が目立っていた。平成29年度では、歩行障害の程度は発症時に比べ改善しており不能例はみられなかったが、感覚障害は多くの例でみられ、異常感覚が全例で現在でも残存していることが明らかになった。更に、スモンによる後遺症に加え加齢に伴う併発症が障害要因になっている現状がみられた。

A. 研究目的

東京都における平成29年度のスモン検診患者の現況を明らかにする。

B. 研究方法

平成29年度のスモン検診の集計から得られたデータを分析し、スモン検診受診患者の現況について検索した。

C. 研究結果

1. 患者の内訳

受診患者数は15人（男性；6人、女性；9人）であった。年齢は14人が65歳以上の高齢者であった。診察場所は、14人が来所であった。

2. 発症時の所見

発症年は昭和40～44年が10人と目立ち、45年以降は2人、35～39年は3人とそれぞれ少数であった。重症時も（無回答：3人）昭和40～44年に多かった（9人）。発症年齢は20歳代/30歳代が9人であり、0～4歳の幼少時発症も1人にみられ、若年例が多かった。発症時の視力障害の程度は、高度の視力低下である「明暗のみ」が1人であるのに対し、「ほとんど正常」～「軽度低下」が11人と多かった。歩行障害は15人にみられ、「つかまり歩き」～「不能」が12人と多く、一本杖・不安定歩行は3人であった。

3. 平成29年度の所見

(1) 臨床所見

視力合併症は12人にみられ、その程度では9人が「ほとんど正常」～「新聞の細かい字が読める」であり、軽症例が多かった。白内障が視力に影響のないものも含め10人と多くみられた。Romberg徴候は8人にみ

られた。下肢筋力低下は11人にみられ、軽度が8人と多かった。下肢の痙縮がみられたのは6人で、4人は軽度であった。下肢の筋萎縮は8人にみられたが高度萎縮例はなかった。上肢の運動障害は9人にみられ、握力低下は14人にみられた。歩行障害は14人にみられ、「独歩やや不安定」～「一本杖」が9人で障害が軽度の例が多く、「つかまり歩き」が3人であった。10m歩行速度では、9人が15秒以上であった（4人は無回答）。外出では、「不能」は1人のみで、車いすなどの介助を要する例が2人にみられた。一人で外出可能な例は12人と多かった。上肢の感覚障害がみられたのは6人であったのに対し、体幹・下肢の表在感覚障害は14人にみられ、感覚障害の末梢優位性は14人にみられた。分布では、臍部以下が5人と最多で、膝以下の4人が次いでいた。触覚異常は14人にみられ（低下；12人、過敏；2人）、痛覚異常も14人にみられた（低下；13人、過敏；1人）。下肢振動覚障害は14人にみられ、中等度以上の障害が11人と多かった。自覚的な異常感覚は15人全例にみられた。異常感覚の程度は、高度；1人、中等度；11人、軽度；3人で中等度が多かった。異常感覚の内容では、「じんじん・びりびり感」が最も多く（11人）、次いで「しめつけ・つっぱり感」と「痛み」がそれぞれ8人であった。冷感が4人にみられた。軽度の下肢皮膚温低下が15人に観察された。尿失禁は11人にみられた。失禁の内容では、切迫性失禁が7人で、ストレス失禁はみられなかった。失禁の頻度では「時々」が10人と多かった。便失禁は4人にみられた。下痢・便秘などの胃腸症状は10人にみられた。「初期からの経過」では、「軽減」が9人、「不変」が4人であるのに対し、「悪化」は1人であった（無回答：1人）。「10年前からの経過」では「悪化」は7人で、「不変」は8人であった。上肢深部腱反射は、7人が「正常」で、「亢進」

が4人、「低下」が4人であった。膝蓋腱反射は、「低下～消失」が4人で、「亢進」が7人、「正常」が4人であり、亢進が多かった。アキレス腱反射は12人で低下または消失していた。クロールヌスが確認された例はなかった。パピンスキー徴候は3人で陽性であった。

(2) 合併症・治療など

身体的合併症は14人にみられ、白内障が視力に影響のないものも含め10人に発症していた。脊椎疾患は8人にみられた。四肢の関節疾患は5人にみられた。パーキンソン症候は1人にみられた。高血圧症は8人にみられた。障害要因は、「スモン単独」が5人で、「スモン+合併症」が10人と多かった。「スモン+加齢」はみられなかった。療養状況は、在宅が12人と多く、「診察時の重症度」でも重度例はみられず、15人全例が軽度または中等度であった。現在、治療は15人で受けていた。スモンの治療を受けている患者数は5人で、合併症治療を受けている患者が7人であった。治療内容は内服加療が8人と多く、注射を受けている人はなかった。機能訓練は1人、ハリ灸は4人とそれぞれ少数であり、マッサージは7人に施行されていた。

(3) 主に生活状態（介護・介助など）

「最近1年の転倒」は7人にみられ、「倒れそう」も2人にみられた。一日の生活のうち、「ほとんど毎日外出」～「時々外出する」が12人と多くみられ、屋内で主に生活している3人よりも多かった。食事での介助は4人と少なく、11人は自立であった。4人で起き上がりに介助を必要としていた。トイレ動作は15人全例で自立であった。入浴では6人が全介助であった。平地歩行では、9人が介助を必要としていた。階段昇降では10人が介助を必要としていた。更衣では4人が介助を必要とし、「排尿時の部分的介助」は11人にみられた。「排便時の部分的介助」は8人にみられた。「介護の有無」では、「要介護」が12人で「必要なし」の2人よりも多かった。一方で「介護者がいない」も1人にみられた。身体障害者手帳では、18人が手帳を有していた。身体障害者の等級では、1級が1人、2級が4人、3級が7人、4級が2人であった。

要介護度は、「要支援」が6人で（1；2人、2；4人）、「要介護」が4人であった（1；3人、2；2人）。

D. 考察

発症時では、視力障害よりも歩行障害の方が目立っていた。現在では、歩行障害の程度は発症時に比べ改善しており不能例はみられなかったが、感覚障害では異常感覚が全例で残存し中等度が多かった。外出可能な例が多かったが、一方で日常生活動作や移動に介助を必要としている例がみられた。スモンによる後遺症に加え加齢に伴う併発症が障害要因になっている現状がみられた。

E. 結論

平成29年度の東京都におけるスモン検診受診患者の現況を検索した。現在においても異常感覚が残存している例が多く、更にスモンによる後遺症と加齢による併発症が障害要因になっている現状がみられた。

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし